

## 堀口先生をしのぶ

私達の敬慕する堀口由己先生は、去る1月17日、岐阜県本巣郡糸貫村の自宅で、73才を以て永眠されました。

先生は明治18年9月15日岐阜県に生れ、44年7月東京帝国大学を御卒業になると、職を気象界に求められ、直ちに三重県技師に任用され、津測候所長となりましたが、1年後には兵庫県技師となって神戸測候所長に変わられました。大正8年には、中央気象台の出張所が大阪から神戸に移りますと、先生は気象台技師を兼ね、同出張所の仕事に関係を持つことになりました。

当時、第1次世界大戦のため日本の海運は膨張し、船舶は増加するのに、航用測器の輸入はとだえ、また、船舶数に比例して海難も増して来ました。これを見て、中央気象台の岡田武松先生は、海運界の援助により海洋気象台を設立し、合せて海運界の困難を打開することを考え、これが具体化を堀口先生に相談されました。そして、先生の奔走により、大正9年に海洋気象台が設立されますと、岡田先生の台長の下に、先生は先任の技師として台長を助け、新しい気象台の業務の発展につくされたのであります。

大正12年に岡田先生は中央気象台長になり、東京に移されましたが、なお、海洋気象台長も兼ねて居りました。しかし、この時から、海洋気象台の運営は事実上、堀口先生に任かされたといえましょう。そして、この頃から10年余が、海洋気象台に於て、日本の海上気象学や海洋学が発展し始めた時期で、その中心は堀口先生でした。この間、先生は業務や研究の指導をされると共に、自ら太平洋天気図の作成に当り、また、神戸測候所長として天気予報当番にも加わり、そのかわり、海上気象の調査や、梅雨、台風の研究を次々に完成されたのであります。

先生の研究で最もよく知られているのは台風の研究でしょう。先生は沖繩台風を例に取って、いろいろの調査を行い、高層観測の皆無であるままに理論的研究にも立入り、エネルギー論にまで及びました。もちろん、その結果は今日から見れば、修正すべき点もあるのですが、当時としては劃期的の研究で、先生はこれによって学士

院恩賜賞を受けられたのであります。また、豪雨についても調査を進め、近年問題の梅雨末期の豪雨についても、わけの解らぬ雨として関心を持たれていました。

昭和13~14年に亘り全国の気象官署が国営に移され、全国に4つの気象管区が置かれ、神戸測候所は海洋気象台に吸収されますと、先生は始めて、名実共に海洋気象台長となられ、合せて大阪管区気象台長も兼ねて、西日本の気象業務を指導することになりました。そして、昭和16年には、30年に亘り住み馴れた神戸から大阪に移されましたが、間もなく起った太平洋戦争は、先生の仕事を大きく変化させました。

昭和17年9月、先生は陸軍技師に任ぜられ、昭南軍政監部付となり、気象局長として南方の気象業務の指導に当られることになったのであります。このことは、先生にはたぶん気の進まない仕事だったと思われませんが、明治年代に人となられた先生の国を思う気持が、あえて、南方行きを決意させたのでしょう。南方では、いろいろの御苦心をされたことと思いますが、結局、終戦間近に病を得て、21年5月に淋しく内地に帰還されました。そして、一旦は運輸技官として復職されましたが、22年9月には気象界から退かれたのであります。

先生は偉いという型の人ではなく、慕われる型の人でした。正義観の強い性格から他人の意を迎えるようなことは全くなく、初対面の人にはぶっきら棒で、こわい感じを与えましたが、実際には心の暖かい人でしたので、一度先生に接した人からはいつまでも敬慕されました。また、少しも自己を主張しない人だったということは、自ら中心となって設立した海洋気象台で、20年に亘り天気図掛主任にすぎなかった、ということからも解りましょう。

気象界で先生の台風論を知らない人はいないでしょうが、表立つことを好まず、また、殆んど関西にばかり居られた先生の人柄は、余り広く知られていないかも知れません。しかし、先生を知る人達は、先生の御逝去をどんなに悲しんでいることでしょうか。

昭和34年1月23日

肥沼 寛一